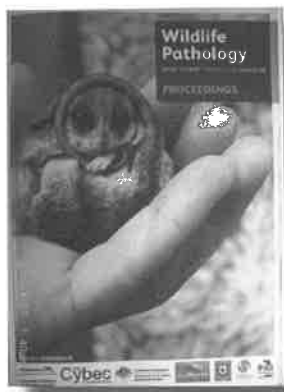


書籍紹介



『Wildlife Pathology: Short Course Taronga Zoo August 08』

Taronga Conservation Society Australia 発行

水主川剛賢・浅川満彦

(酪農学園大学獣医学部 / 野生動物医学センター)

序

2008年8月21日から24日、シドニー郊外にあるタロンガ動物園で行われたショートコースのテキストである。A4版345頁。定価はどこにも記載されていないが、2009年のWildlife Disease Association (WDA) オーストラリア・セクション年次大会で、当該園のDr. Karrie Roseから入手した時、30豪州ドルを支払った(もし、最新の入手法についてお知りになりたい方は、とりあえず、浅川にメール askam@rakuno.ac.jp 下さい。上記セクションか動物園の獣医師にきいてみますので)。副題はDiagnostic Pathology of the Diseases of Aquatic, Aerial and Terrestrial Wildlife。この本を手にとった瞬間、たった4日間のコースでは、範囲が広すぎ是対無理!と感じさせた(この点は本拙文末尾で再度論じた)。だから、実際のコースでは、各講師は「時間切れ!詳しくはコレコレのところ、しっかり読んでおいてね」と言い残し、さも残念そうに教壇を離れていったことであろう。すなわち、自習を前提に執筆されていたはずである。章あるいは項(および講師の性格?)によって、内容的な粗密・濃淡の差異はあるが、本学会の会員諸兄の自習にも優良なテキストであると信じ紹介することにした。例によって、まず、私の所の学生さん(姓は「かこがわ」、動物園飼育の家畜について寄生虫検査をテーマにした方)から概要紹介をしてもらい、次いで浅川が(寄生虫症を中心にした)摘み食いのコメントをするスタイル

を採った。

(文責 浅川)

刊行目的と本書概要

近年、SARSや鳥インフルエンザなどの新興感染症が広がってきており、世界で発生しているヒトの感染症の75%以上は動物と関係するという。換言すれば、ヒトと家畜、野生動物の健康や環境衛生は、お互い密接に関係していると言える。しかし、この領域については(豪州であっても)野生動物への健康管理に注意が払われることは希だし、病理学者の高齢化や訓練プログラム不足などで成熟した科学分野としてあまり発展しなかった。そこで、タロンガ動物園では、これに対抗し、野生動物病理学のサマーコースを計画、その教科書として本書を出版した。本書は1章から9章の総論的な内容と10章から23章の各論的な内容が含まれた(章構成は以下の通り)。

1. 健康と病気(特に、free-ranging種に関して)の概略
2. 野生動物感染症研究のための機構
3. オーストラリアでの野生動物の健康とバイオセキュリティー
4. 野生動物の監視(新興ウイルス症発生に備えた予備的機構)
5. 鳥インフルエンザと野生動物(特に、アジア系統H5N1ウイルス群について)
6. 野生動物保有のウイルスを媒介するベクター(調査・診断指針)
7. 野生動物の疾病(発生)に関与する人為的な影響(因子)
8. 爬虫類
9. 水鳥の疾病
10. 飼育下の野生種
 - i. 哺乳類動物の感染症(霊長類を除く)
 - ii. 霊長類の感染症
 - iii. 鳥類の非ウイルス感染症
11. 鳥の疾病
 - i. *Macrorhabdus ornithogaster*(メガバクテリア)症
 - ii. DNAウイルスによる感染症
12. 魚類の比較病理学
13. オーストラリア特有とされる水生動物の疾病
14. ウミガメ類の生態と病理
15. 両生類の疾病
16. 海棲哺乳類の病理学
17. 単孔類
18. フクロネコ、フクロアリクイ、ポッサムとフクロモモンガ
 - i. フクロネコ
 - ii. フクロアリクイ

- iii. ボッサムとフクロモモンガ
- 19. コアラ
 - i. 疫学
 - ii. クラミジア症
 - iii. リンパ肉腫
 - iv. クリプトコッカス症
- 20. コウモリの病理学
- 21. カンガルーの病理学
- 22. ウォンバットの疾病
- 23. シカの疾病と病理学

本書の良さは、魚類から哺乳類・鳥類まで幅広い種類の野生動物に触れており、豪州でよく遭遇する症例を項目別に分かりやすく記載されているところである。特に、地域的なファウナに関連し、各論では単孔類・有袋類の疾病などについてかなり詳細に記載されている。私（水主川）が最も興味深かったのは、7章の野生動物の疾病のヒトへの影響である。もちろん、本書では人獣共通感染症の病原体由来の疾病についても触れているが、DDTやPFOSなどの抗生物質や毒物の影響、野生動物が新たなベクターや中間宿主になりうる危険性などにも言及されている。また、家畜と野生動物との間における病原体の時空間的な変化も紹介され、今後、予想される温暖化や環境汚染の進展につれ、こういった感染論的な複雑化はますます増大することが示唆された。私を含め、これからの獣医師は動物（個体）だけに注目するのではなく、それを取り巻く環境および環境の変化など、より広い視野で活動しなければならないと強く感じた。（文責 水主川）

寄生虫の摘み食いのコメント&我が学会 SSC への示唆

カナダのトナカイで中枢神経系疾患の原因となっている肺虫類 *Elaphostrongylus rangiferi* が北政から輸入・逸脱トナカイに起因した人為的感染症の病原体という7章での事例紹介は、関連のものがウイルス症ばかりの中で（粘液腫、ウサギ出血熱、ウエストナイル、狂犬病）、燦然と輝いていた。次の8章、爬虫類でも病原体として、ウイルス症5例、細菌症8例（ちなみにウイルスのIBDとヘビのパラミクソ、細菌のアエロモナスでは、これら感染にダニ類 *Ophionyssus* 関与）、真菌症基本的に1例（本文には5属列挙）、原虫症5例、蠕虫（線虫、舌虫、条虫、吸虫）症4例、ダニ症1例と、ここでも寄生虫症は存在感を示した。しかし、蠕虫類の記述は、大雑把で、たとえば、線虫症では「大きいのが蛔虫類、小さいのが肺虫類」とだけ記され、学名も何も無いのは、いくらオーギーでも…（もちろん？、臨床家に必要な症

状や検査で重要な虫卵サイズは克明に記されている）。だが、次の水鳥（第9章）では主な蠕虫症が住血吸虫症と蛭症だけなので（他のグループの病原体は充実しているのに…）、まだましとすべきか。第10章以降の陸上哺乳類の重要な寄生虫症については、伊藤・浅川（2009）で紹介した類書に関する記述とほぼ重複する。と、いうことは数多い寄生虫症の中でも、臨床や健康管理で必要なのは比較的限定的なので、予習しておけば概ね何とかなるということの意味する。さらに、もし、分類学的に手に負えない奴と遭遇した場合、そして、時間も興味も無い場合、さっさと専門家へ丸投げされてはいかがでしょう、ということも意味する。私が、この本でもっとも注目させられたのは、第13章の水生動物における新興的な寄生虫症で（例：記載されている原虫類の属として *Perkinsus*, *Marteilia*, *Amyloodinium*, *Piscicodium*, *Chilodonella* など）、魚類ほか軟体動物の疾病が詳細に記されている点であった。将来的には、専門書刊行もあろうが、今日明日の話ではないだろうし、勤務先で魚病学<寄生虫学分野>も！教えなければならないことになった幸薄い教員（私のこと）にとって福音となった。

さて、この本の基盤となったタロンガ動物園のコースは4日間、私たちの学会が各施設で実施しているSSCと同期間である。だから（当事者の1人として）容易に想像がつくが、4日間とはいっても、初日は登録やオリエンテーション、最終日は交通便もあるので昼前で終わる。したがって、講義に費やせるのは、全日12時間×2（日）と半日6時間×2（日）（1日12時間の授業なので、無茶苦茶きついですが）で計36時間。23章あるので、1章あたり90分になる（ちなみに、執筆者は各章で異なっていたので、講義担当者は20名を超えていたと思う）。当初、本学会のSSCは専門医を目指すための卒業教育として計画されたが、ご存じのように学生さんのために開講されている。これはこれで重要な意義があるが、もし、将来的に、当初目指した卒業教育の機会を企画するならば、今回紹介した豪州の事例は参考になるはずであろう。（文責 浅川）

引用文献

伊藤友貴・浅川満彦. 2009. 書籍紹介『Medicine of Australian Mammals. (Vogelnest L・Woods R 編集)』CSIR (Australia). 野生動物医学会ニュースレター (29) : 30-31.